美濃舊衣八丈縞談

壹

特別
へ13
3646
1

文化甲戌

曲亭主人編輯

蘭齋北嵩繪畫

八丈綺談

野州宇陽文庫

38-3031

八丈綺談序

同

野州宇陽文庫

大鳥

山青堂藏

吏勤書之苦著述之勞古人最憚之矣謝在杭曰思慮之傷命甚於酒色宵旰手余遊戲墨者二十四年於此彈精竭慮勞又甚矣自是用心於棄餌或丹或湯嘗浦劑者亦復宵年矣雖無能恥倒其倚樹碎甚據梧之効也一日閱許氏本事方曰用損讀書一減

思慮二專內視三箇外觀四旦起晚五
夜早眠六甲凡六物熱以神出下氣後
蘊於胷中七日然後納諸方寸修之一
時近能數其目睫遠視尺箠之餘長服
不已洞見牆壁之外非但明目亦延年
晉張湛嘗授范寧者是已余祝其方之
可治焉幸然嘗試之乃不果固有原憲
之窶無子貢之殖自非勞意思於著述

豈得畜數口縱以奇方故雖能耐老延
年又由此苦於飢寒則亦何益既已有
良方無由採藥已矣諺曰雖有珠玉不
如金錢雖有神藥不如少年徐福嶋子
入海而求僊還江而訪故無益於秦漢
如二子徒知其方之不死又惡知採藥
之無塗至今爲俚俗所笑我唯欲與此
異趣得焉哉故欲攻未者先治其本欲

固蔕者必深其根設支始不固又不堪
終猶且耐久者我希矣嘗試譬之白龍
之為神魚服而不能避余且之網豈有
他哉微彩惬佯細鱗狂態嫚於人間蓋
遊戯之失也我唯欲笑之又不可得今
茲及著此書即述此事以解頤
文化十年癸酉春三月十又四日書於
蓑笠漁隱

八丈綺談目録

齋藤道三　齋藤義龍　牧村備門長晴
尾花才作　尾花才三郎　蘆月角六
蘆月一角　白木諸平　手口鍔仏
猟夫復市　猟夫株藏　倭子諸太郎
僧的心　小斬岐藏　主曾丈八
牧村牛仏長通　小桔梗　間柴
喚聲　四　谷
治駒　阿駒　澳水
姓氏畧目終

作善百祥
不善百殃
酒婦
谷折
美濃の
尾谷山
白木
諸平
樵夫
西方論
縁葉
卑
喩愚俗
悪僧
午句坊
不破の浪人
尾花才作

在原の行平の神靈
尾花が新婦牧村の活駒

白木屋阿駒
尾花才二郎

みれまーや
さーれまよろ
ちのこと
狂女
澳水
白木屋の小厮
復塚の岐藏
蘆月
一角

僧曰
霧海沾洲
答云
僧
願主
鉤鐘建立
願主鉤心
願主鉤心
主管丈八

八丈綺談總目録

發端　尾花乃秋
又　蘆の一叢
第一　不破の関　燈歌
第二　落黄葉　燈歌
第三　豆煙霞　燈歌
第四　あ足乃駒　燈歌
第五　驛舍の鈴　燈歌

總目録終

美濃舊衣八丈綺談　巻之一

東都　曲亭馬琴編演

發端　尾花の秋

天文年間のころ。稲葉山の居城たり。美濃の國主と時めけり。齋藤山城守道三は西京の人なりしが。油を賣て活業とす。又今様乃曲子を好て。声妙に唄ひつ。遂に美濃路に住歴して。國司の時頼藝が長臣なる長井東九郎門尉愛せられつゝ。ひとしなみなくその家の老臣となりつ。道三元来大なる志あるのみならず。頼藝主從墮弱にして。州民こゝを上背くとゝえて。私恩を施し。党を樹て主の長井が死るに及て。能くその采地を横領し。勢ひに乗じつ。竟に数郡を攻併て。剥國守頼藝を滅して。濃州一圓に管領せんやと。時氏は累世當國の守護なり。國乱れて氏板く

めのうち。なほ舊恩をもて妻となり。流石は事を平介少せば民乃亟ち弑
失ひなん。竟は大事成就ぜざるべし。竊は腹心のめとなく。頼藝をうしなひ後
やもとくとるふいもうと。とてもいもとうとひ決はけもど人の揀んと云
おそれとて。伊賀。牧村稲畑水の諸家老少と絶く意中の機密を告ぐ迫と
欲得とおふ程は。年来不便のめとうとく召使ふ小扈從は。尾花才代。芦月一
角といふものありけり。尾花はその性。李向を好く謀あり。芦月は人となり。
武藝を嗜く心悍。いづれと年ふるうけもどと主のためは命を惜ぜ。
貳ごろなれめるふ。彼は少なとぞ迫ふ命せん。現才代が智とて謀り。
一角が勇めく軽べいと易べきなりとくこころは撰定ぬつ。有一日
道三八件のめどとを招こうとく。竊はをいえもし女ふとも
ひくとしく。富田の館へ潜入り。頼藝を刺とろうくこぐ為は患を除ぐ後耀

の忠うるべ。恩賞ハ云は仕ぜん努。人ゆるもうもこそと正首は密語へ一角を
いうとわくぐ。満面は笑を含こ仰うけあるいひぬ彼人の首級を齎し見参は
ハもとんと。三日の外を出べうもぐ。はこころ体へめうと縛もるげは心ーくべ。
尾花へ呆もとくもうもぐと主の面をうちもり。御淀でいひどとうのる
もうるべきもん企ともおびこいひうぐ。頼藝ぬ堕弱ものく。美濃は守護
職を停廃せうもと。富田の正徳寺はうくまセどと桀紂ぐ悪虐をみ
めふとわうぐ。運は時あり。人は盛衰あり。君天運はうるハセめ〳〵微賤
のもん才とうく。濃州数郡を領ーめひ彼ぬ名家の後ふうく。先祖相傳
は乗地を雲ひあひぬこハ戦國の流俗ふうく。例あるうることなもどとこ
殺もこハ不仁ふう。人ゆけもべ天は捷。天定て人は捷抑不仁不義はしく子
孫繁昌とるめ也天おそろーさもん企ハ応ヤさん所をもうぐおひひ

止りあらんとのこと。かくしゆと一角を庭目よりいく。そひの外よ練しく。道三
こと云ゆとわくど。呵くとうち笑ひ。如此ゆゑ今こゞいひしへ。就れ
なり。假令よ言を設て。汝ホを試てるふ。一角ハ勇氣あるまりあるく。思慮
足らど。才能ハ思慮餘りあるく。勇氣足らど。彼が撃んとゆひしを忠
是が犯しく練ると忠るり。きゝとども。きづふ理非を辨れば。才能がまうひ
ところ主よ益あり。汝ホこゝろを一致ホく。ゆゑとあくべ憚らぶ。成
練よ。ゆゑのゆハ才能捜ると。引出物べとく。左文字の刀をとらせ。
尾花ハ感涙を拭ひわくど。弱年なる微臣が異見を時よりく心ゝ
構どゆふ公私の大事こと。ゆるゆど。君既よ絶てるを継廃てるを興ふ。伝義
のはてろ任さば。練鼓ありとふとを苦薬く。當國なぐわふ入るべ。
歓びてとてまとのなと。祝つ。祿ありて。ゆんまと退出てるべ。芦月一角ハ。

面目を失ひつゝ。ゝとと嘆息。時頼藝ハ當家のゆふ。実よ腹心の病へ。渠當
國よわゝん。後ハ遂よ子孫の患ひをなるべ。戯謔とゆひよりとゆる。就
ゝとゆりとハ宣へどを。竊よ頼藝をうゝんと。謀その図よ當ると。騏驥
も衰てハ駑馬よ及ばどゝ。君いつなるべ。迂遠ハ才能が仁義の講釈よ説
惑さるく。盗ホ糧を齎。雖よ刃を藉ゆるとゝ。ゝと。咲ハ。道三
莞尓とうち咲て。一角さのと恨るとゝ。今ゝハ汝と才能よ心中の機密を告
るふ。渠奴怒よ後ゝど。博士ぶりゝるゆゑ練言を聴べゝとゆふ。ゆゑ練ハ俄
ゝりくゝ。就て。ひ紛ゝ。練言を納て。引出物をとゝ。渠が心を安くせハ
変を俄ゝと。ゆべるり。汝が武勇ハ才能よ勝ると。ゆゝなりとゝ。當田
ホ郎紀。頼藝を軽ぶ。ゆや。とゆべ一角小膝をとゝめ。そハ御淀少やゝ。
唐山の秦舞陽ハその年僅ホ十三ゆとゝと。燕の太子よ相譚て。秦王を

刺んとせり。某今茲廿一歳秦舞陽と共に年さへ既に八十にぞ成ぬ。
蒙てば君が武徳を頌し載さ。竊小富貴人に勢をく。頼藝を刺んと学ぶ迄と
ありいと易うべきことなれど。心憎さの才化に渠が當家に長臣なる牧村衛門の婿
なるとぞ。今君の仰せ下さるべき。畏き君を疑へ欺さる
とは妨あり。妨あらくは事成らじ。その密交をきれるめへ某と才化のと。
竊に尾花を殺しめんと人をまとくるとなく又疑をとるとは賢愚を
めぐしあへりと言葉を巧ふまうせるべ道三分のうち点ぞ汝が遠謀
こそ意に構へうまくべ今宵才化を城外へ誘引出し一人まとど殺て捨べ
詭計は箇様にと主後耳をとりて。閑談とれをうつしけり。抑芦月一角が
今絆れ便宜をゆく。尾花才化を園琴ふ。渠が男牧村さへ。追ひ失んと巧
ぶる。一朝の怨はあらじぞ。彼牧村衛門に両個の子どもありけり。家子を牛交
と名づけ。末女を小桔梗とゆびつぶ。小桔梗二八の春を迎へ。遠山の眉翠てほ。
桃李れ腐匂ひ。さへぬべよ。色ふ髪權にて。みるを人の情をぶ一
角はいちはやく。小桔梗を要んとへく。媒妁をとらへて。その家をいつせ。衛
門は渠が人とかへ。ところ彼とのそなたとの縁結をうけそぐ。
みづから擇へく小桔梗を。尾花才化に妻せば。去る年春にまうに一角はこの
ちをぬと打をへくとへぞと。牧村は權家に才化はその婿なり。今故なしく
彼ホと爭ひ。捉をとるべきやうのなけれぶ。恨を抱しと氣色ふんぜどるとも
ぐるとまへどよ。ちらどもと使をゆく。ところに中よりへく飲びまず
まや尾花を殺んとへく。准侯を志ろけりぞ。ろ程に才化はこの夜直寝
なりしへ遠侍に臥さる小子二人の比宿刃ろ使者とり。妻の小桔梗が暴に
疾へづらひくいと危。へく退へく看病ぞ息の内ふあひぐかん。

手紀村猛つ

お月一角

さらさら才・彼を
とらえん
とくと
一角
命を
隅を

尾花才・他

と忙しく告るあり。其他こゝに不驚さしてく。縁由をとゝろうまうし賜へく
主君の許と稟てく。走り出て使を專とす。何処の紀ゝ人恋を乞せぬ。乞ひて
おひながら。うちとおくべ紀とすなり。拾ば後者紀を俱せぬ。ぬとり東の
城門のおろなる。勇牧村が門を敲紀て。彈の熱を告おし。城の後門より
走出て。長柄門の上なる。あのが宿亜を投て曳。此こを五月夏の夜のをなれ
ば天霄やゝぬ。薄月夜途をいとぐぬるつ。蹴揚の泥と裳をくく。苦乃
運びもあて。仕せど。引提たる傘ひて。夏草の叢掻排ひ。辛おそ十町
あまり。稲葉の城を背おり。人家さへ遠離るゝ。小松原を曳て。猶小目さ紀
と見て。大刀風を。吐嗟とおろ。左なおこ医
疊ろけくる刀夫と。傘ひて。何のなきび名告を乞せぬ。
ひとりおくこゝと見て。引ぶせんなりなるが可惜命を失べ。この賊奴と

置ろつ。面と信と遠しなおめて。ありとどゆこびうちいるさこゝ廿八月
一角秋と風刃と冴りとゝ紀て。頃ゝもりせ〜を拭ぬひぬ。捨て冷笑ひ
ひぬひて。尾花才伝。とてとひて。信くハひくさぬ。眞土の墨と一五一十を。
説ゝ。しく成仏さ。ん根を断て。紙桔を主君今度れ。ん企ハその図
と當ることを博士ぶ〜る汝が諫言貳ぬ。ひるのなりとく。
いく憎ぬ。ぬと明こ地と罪ろぬ。ぬとり彈の甲ぶとなりろ。れば
とく助けひぬべ遂と密事を洩さぬ。且く心を安くさを。計べ紀術ひ
とて。練を紡ぐ。ひ〜ろ。左丈字の刀を賜て。汝が命を割ん為ぬ。
ゝれ密と仰をうけ。ひろ。汝が妻の小桔校が急病と称欺く。更闌て図抜。
こゝで殺ゝ是主命。年来憶をひ〜ろ。小桔校を奪ゝれる怨を復ゝ
ゝ。宿を。二ぬ〜ゝ果さんと。汝を俟ゝ久〜ゝ紀刀を受ゝと敦圃ゝ才伝ゝ

歎息し。良茂が口ふ苦く。諫言耳に逆ふ。北下が諫く胷を裂き。伍子胥が屍
の皮を盛らる。忠臣の鬼となりて。屍を野に曝さんと。固より庚幾ところ。
さもなくとく。好佞ふしく主を惑す。汝が為ふ阿容こと。ひとり命を隕さんや。
冥土の伴侶覚期せよといひもあへず二角が引抜し刀を額に翳し。兵盛の
云詎ふ中ん。死出の山路とく走れと罵る声とともに兵ふ揮閃す刀の下と。左
右へくん潛る。尾花も刀を抜あへし。一上一下。劫くまで勝ず。鎬を削る大刀音の
丁と撃てふ引ともに。又丁と挑あふ。刀尖より火を出し。奮撃突戦時こそ長
一角が日来ふ。屑ととふざりし才化が武藝侮りがたく。拳れ大刀もぢ
狂ひ受ながしとる刀尖あまりて。眉間を礪と砕著るに。株に跌こと度と失ひ。尻居ふ
撞と溥渡へば。才化ふくる。と跳蒐こ。又腸を丁と砕る。刃ふ撥りく力を起し。辷り
咲く両後の泥に。流るく鮮血を啗茹く。矢声を激し戦へども。深傷なれば勢竭く。

遂に尾花に殺されぬ。ひて尾花が才化が屍ふまふ砕伏せる。一角が吭を鍔元
まで刺徹し。躍く死骸にのぞみつく。血刀を把なほ。肚を砕んとする程に。
やゝ候尾花と呼ばけく。循塚のかとりより。遽く走り出るを。誰とりんとなれば
別人にあらず。才化が男なる。牧村衛門長春なりけるとぞ。
いふとともに。且く刃をとぢもとぶ。牧村頻りふ嗟嘆く。稍その白へどうち
まもりつゝ。今こそ本性なる紙。祥しく忍びとて。曩に和殿が門を敲きて。小桔梗が
頓の病著いと危しとて。宿所より。使者ありぬと告しぶ。胷うち驚ぶく移りて。
中にくんだやとおもひつ。文閣さるふ私平奴隷を。呼ぶ時や稍ゝ子ども
聞ふ後者ども。俱ぜどとて。主君非道のもん企一角が好
曲さへ。渠ロづゝいふ下りをもちゐあるり窃やのく。なほ。ちの山呼人を殺ぶ脱る
べぶ。ちゝなくともそなすふ。自殺せんいるれ早うぞまづその刃をさあ。

とのべて才能形を改め。主君に度のあん企。ひご厄難の縁故さえ。ちょうとあり
せてことば告るふ及ぶど。一角は毒悪なる。佞人の口どと。某を殺さんとせし
主命とて初めりきりつを渠を殺しは主君を惑を蠱毒とする獲ひ金を
出紙息下小足さんしあのく。おりとをあん使を。殺しる罪脱ぶど
すぐなりといひと果ど又刀尖を左右よめづし肚へ突そんとしあり
おるべ。御門は急ふ推禁めさのくる早りそいふよりあり。主よ仕て私なく。ぶそこ
ぶそ有用の壮佼ありとと。女児ぶ係る和敵の必死恩義ふ猩さん。憂ふ消く。
こうとまく女こおく禁んや。死は易しく。生は難しとそと死ぶさ命なり
ばば箇様こと計まりしく。主君を練めなりば事成らどしくあん佩刀を織
さくとありとと死をして尽くと忠臣の誠よ主君の惑ひを解。大約は度の
ぶ企とおひとぶりあひるべとしあく命を損さんより。適る倍る幸なりしば。

短慮は功を成ぶ巳年ころけまびかる附思慮あるふ俗く事冥くぶ。ぶ禁あん
このあるそかてと自殺おのふやと理り迫る言の業よ。今散かる花瞥
もおひくくうち点ぶ不得は老功説得く好。おくくび且く自殺をぶめく。
ゆくくび主君を練ぶさんさんとく血刀ぶ拭べ月は剣も雲霽ぶゆう
ぶ胃ふおさあくる。朝とさあふ賠せどと刃はなれくく死樹下園ふおちくり
鳴杜鵑死くく冥土へいる夢ふ山を常を示を遠寺は鐘よ。暁ぶ近くるを
あけり不顕齋藤道三。その疫さり。人おまぶ尾花才能を殺せとて。芦
月一角を遣せくよりいふくと俟ぶど臥房よ入りなぶる。通宵も
祝ふまぶど。汀や暁るんとまるびよ。臥房ちくくするあり一角歌と
問ぶおりと答ふとくこかるんと。ゆ入まく。屏風を推開つせくるふ。
一角おあらぶて。今おや死せりと見ひる。尾花才能りしぶ。果れ

佐竹実力仇盛細血

果して太息を吻き。汝何とて帰りしと問へバ才化さんざうふさみ。微臣が諫言を諾せ給ハずもし。しくハ止らるところを。推量りしが。思ひの外にあればふかくわとのぞみなりて某昨夕富田へ潜かれて。頼藝ぬしの御首級をあけりて見バ実検に入れ大そ。推参してくいふなり。とて齎せし首桶をおしとりちらくさしよせて蓋を取とるをとらんとせバ。狼藉みる齟齬て一角が頭をちとせバ道三勃然として膝を立るおし。せんとし才化。汝ハ誰が許を稟て。一角を殺したるこのもの何の罪かある。ゆるしおくべきをと敦圍ぜら梲に立て刀を取て立ちかんとせバ。才化騒ぐ気色もなく。一角ハ君を惑心せし。奸佞の癖者なれバ罪ありと宣ふハ千慮の一失是非に及ぶ君に媚て悪を勧め。絶て安危を念とせざる。かゝる鳴呼の癖者を罪しとあらねバ。頼藝ぬしハいよく罪に陥られ根ありて。亡んとあらずハさらん。微臣が迷ひとれ一ツ。又時敵ハ當初君が馬を繋だ

あらし。長井氏の主君にして。當國の舊主なり。勢竭て一郷に。その身を置るゝ身なれバとて。これを祇むるハ非道なり。民の心にかゝるハ只義の一字にあるを。祇む非義非道の行ひあらバ。何の民かよく君を君として仕ふべき。微臣が迷ひこれ二ツ。君が禪の道三ハ原是曹子の語に出て。道に貴ぶ所者三とあるにハ違ふ暴慢不信として鄙倍在らバ。貴道の三にハあらず。微臣が迷ひ是三ツなり。愚なる心にも既に三の疑迷あり。君に非義のおん企をおひとゞまりあらバ。一國の民みな疑ひて。忽地離れ背くべし。地を闢き國を富し。徳を積ますとも。民徳風に靡くと見ハ遂ひあるべからず。藝ぬしハ遠く去りて。久しき日なからん。その理をしらざるに。主命を受て一角と去りつゝ渠を殺しハ。私にあらぞ。きのふ微臣にあかりし左文字の刀の徳によらずバ。奸曲邪智の癖者をころぞ。君の出身をづらく。撃せあふ小畏へのからぞ。

もてゝ今この首実検の報謝のために首級をうけまゐらせて愛ゝ
ぞや。君に過失なしとて。老臣の禄を重くし諫をぞ。外様の
まうをとゝ通ぜぞ。諫言の道塞るとて。貴人みづから法を犯しぞ。その
罪を改めぬ由。臣ら某恩賜の刀をもて一角を殺し。臣として君を
凌ぎ下として上を犯す。身の罪を思へ。ぞ。ぞ。紀事紙に記しひゞ記
てをまうをとゝ皆君のためなる紙性憎しと思ふ。身は醢にまゐらせ。固
より惜命にあらぬぞ。まうせしを一言半句も用ひあらぬ一期の大慶ぞ。私の
幸ひ。ぞ。と席を拍涙を流し。抜放さんとする刀を下推居りて項を伸し。
死を究める壮士が。戒忠氣を顕してうちぬ怒臣道三を縛める道無
逼らしてく。今る刀の手りをを猛くもりぞと歎息しく。瑳礙とうち納め。
嗚呼過り失ぬ諸侯が辛臣五人あるとぞその図を失ぬぞと聖経にあるはを今とも
思へあらぬぞとこゝろ兆へいつぐ佞を賞せぞうん現芦戸一
角が奸佞が癖者ぞ紀佞ぞ刀ぞりく。渠を殺しふむはこのゆ秘て人なる者ぞ
とぞ。退アすく体ひゆとぞふまりく感ぬぞうぞ刀再び生るぞ。
欲しき小才伝が涙坐に禁あんぞ。寛仁大度に在ぞこと。諫めまうせしひひへ
あれ今の却淀が一郡ぞ。あらるふまてゆと回答まうしく首桶を袖に纏ひて押
隠しぞく宿所へ退出つ。密ぞ小一角が頭を埋めく人に来ぞ。ぞとして
道三へよろづ行状を改く。生るを愛し。殺を戒嗜を己を正して佞人を遠ざけ。
善政ぞとく彼此にかゝえしく。美濃の州民みな歓びく。隷をぞ召ざるめと
ゝ。ぞ小至く時頼藝が憑む樹下に両りく。富田山と称り沼ぞ。狙逐ぞ山
ぞと逐電ぞく往方とまりぞうりぞ。道三が志を忽地に成就して刀小鬱
岡ぞうりぬ。芝俳尾花才伝が精忠にまりとく。そをとゝ加恩ぞ地

五百貫を与るよ。才伝ハ辞して受ず。つくづくと思ひ巡らすに。彼風ちくやる今の世の人の心よ常ゐけもの君の罷も憑ずて。才の功を誇るふはよる。彼芦月一角ハ奸佞の癖者なれども渠のうらん心を察しもてぶつる君いそぐ感激しく輙く諫を容ゝ。さまるんこゝ猜ハ彼よあり。ちるふ芦月ハその家既よまり絶てそれのゝひとり加恩を受てハ心よ愉ゝとおりいど。加旃一角を殺さと死よ危の臍を傷らもとゝろぶ。その痕ハ癒ゝ愈ゝとも折ゝ疾ゝ堪ずと物よ崇あらぶと。吾愬よ用ひゝとゝく。人の妬媚を受んより。仕を致しく世ゝ出ゝ。おゝとゝ出ゝとゝひゝぶ。まゞ男牧村よ相譚つ。病よ托け只顧よ才の暇をもとめ牧村傳つゝ。ゝもさゝゝ道三ハらく惜く懇よとめよ久しゞ。再三再四乞まうゝ出主もさゝぶふ術なくく。才の暇をとゝ出ゝ。時よ天文元年秋九月尾花才伝ハ。妻の小桔梗と去年の冬く挙ゝる一子才三郎のゝ携つ。猶ふ山を退て同国不破郡なる。関の小川乃ゝとゝふ二町三反の田園を購ふ。親子三人が衣食小充富ふあらゝ。ゝバ力と中とく。読書学文向をのゝうのとゝるふ。妻乃小桔梗とその性怜悧よめるゝ。ゝぶあり。しゝ其紙恋ゝとおりゝぶ。みづゝゝ火を打水を汲ゝ。ゝゝぶ質素紙旨ゝつ。坊をぬ宿となりくゝ。ゝゝぶ子ひとり小慰めくく。尾花の秋と今下ゝ。ながめふ倦ぬ心持ゝり。

芦月一角

芦月一角が父を角六とのひゝり。年四十よ乃ぶまぐく。子ども和ゝとゝ。ゝゝぶ霜よ美濃の尾山ゝる。因果塚よ祈ゝつ。一角を挙ゝ。そ者の尾山ゝ不破郡ふあり。ゝゝよ古墳あり。因果塚とゝふ人ゝ。その廟幾ところを因果と唱ゝく祈ゝるとゝ。ゝゝ霊験あり。ゝゝとゝを信心を用なるとゝ。ゝゝ邦崇ありといふ。かゝるゝゝゝゝとゝく祈るゝゝとなれよ。芦月角六ハ子ゝゝ

ふるく歎くのあまりにこのびくによる落しく。竟ふその利益をなさうこと疑ふ
よろこく。主の道三が稲葉の城と築ひ頻に因果塚の利生を唱てあらはし
彼山に一寺を再興あるべうと思ひ顧勧めまうせうが道三この議いなむとそ
諸家老に同じてよ或いあるべしと意ひ或いあるべうぞとまうしく
爰後一決ぜざりそ。はて牧村清門後ろとく乗りぬ道三又彼塚のもとと
苔くそその是非を同じてくべ。清門答くこの幾基鎮めべうぞ。彼因果
塚の縁故八里老の口碑に伝る紙ゆくひーよ。むし在原約平朝臣美
濃守ときし野上の里なる柏木といふ手閣女を召れつ。流ふぞ契りあひ
しが。任期果てく彼洛の日。再会の像見ゆく。年来多のしめひさる硯の背
立ヨリ上稲葉の山の峯に松とーゆく今ふりまんと留別の歌を雅書に
柏木ときしつ。都へ上りのひとり。世ときの歌を。約平須麿へ左遷のとき詠ぶ

とよめるとぞ。稲葉山のゆくより。當國の名所小くの平朝臣はやさしく
よしと四史に見えく灼然さり。ひくく柏木八約平と悲慕ひく件れ硯を
さと放さぞ。乾さぬ袂の涙に。玄年と暮ー。今茲と明せば。いとど歎に堪
ぬ。世代ふりみ月と墓ふるく。硯と友と墨染の衣に伴く容式変
美濃の尾山に菴を結く。生涯約ひまるせ。その迹竟に寺となりて
柏芒寺と号ーける。住持の僧。数代の後。午句坊といふ悪僧住職せ
この比不破の郡司が後家に。谷折といふ。良人がかすそりーにより。
午句坊に魅さる。密通野の年と経く。良人郡司が世代去くいく
すもく憚らぞ。夜ゆく柏芒寺へかよひつ。彼悪僧と快楽せーゆく里
人大くこと怪ふく。あざこ笑ハざるとも又彼郡司に一子あり。其
名木二郎とゆふ十五才に成りぬ松の樣に成りぬ。名木二郎

因果塚の縁起
淫好その子を殺す
木二自
牛句坊
谷折

牛句坊落花 木二郎が因果 悪報がてきめんに 才二郎が えんが因縁 …張本

そてき木のうれ名中のくぶふ朽をしさるよことしさん父が子ふよわかひど彼室
夫の猟うよまぐその面影もなのづから午句坊ふ肖ころとく里人ホが
なりさ讒言さんふゆえ仰ちる浅ましれるいふべうともわかぶらぬた
ふ寄生の者れなる果をいふせん。ひとや形貌ハ人ふつく獣の生を禀ろ
れん親のうぬ親とうせ人のうぬ人とやうえより。親と親とろかふ於けられて此
身を殺さバ年来の悪行を改て誠の道へ入りあふ御導をとなりぬべし。さる
とくあるり死を映めあるもれ母が倒のごく。柏芝寺ふ止宿せて夜木二郎が
面を包て形を変更閑て彼山寺へ潜び入るふ。宗閑いよく知り法師と
そまつべ母が枕方なる賎布の金銭引出し。驚きさ婦んとしるなどろりふ二人が枕
を礙て跳て足音ろく走り出とれバ吐嗟と驚て悪僧淫婦ハのろのるとも
身を犯し倫児等と興ろけつ中まと谷折ハいちとふせて竹縁のおとろふして

この坂後よ 才作が昔 ふぜよ 妖の話ぶる 張本

木二郎を引とめて捩倒さんとさる程よ顔をふんせで背向よなりて母を推
退衝退るその隙よ午句坊ハ戒刀を引抜つ。まり蒐て木二郎が右の腕を
うち落せバ苦と叫びて仆るを処紙谷折ハ上への方へかりて押て頭紙
かせそりさて灯をとめて砍殺せて。倫児をうんでもぶ悉ひがけなれ牝特
中小峯ふる苑と含の木二郎さ懐中よ遺書あり。親の悪のよ身を怨ミうら
漉計て死るといふ筆よ誠を見へせらハ孝ともいうん賢ともいうん。淫楽よ識を
そうぞ良人を良人とせざりける。谷折ハうもとぞも今ハ丈よつらが子れ横死ふ云
む術なくての限り紀口説腸を断哀傷の涙と共ふ声を惜ず。流石ふ子いや
義さうけん彼戒刀をとられとりて。吼り死さり死しるりけるさまぶ山寺
牛句坊が住持しとより。衛てよ荒まさり。徒弟同宿ホとをてちるうて。
このとれ僅よ銭八貫一百文の外ふ物もなけれバ。木二郎がとろて走ろ。

財布の中なる金をもて乃當寺の什物なる稲葉山の硯あり。破戒無慚の
の悪僧も。親より過に勝りける。かくして子をも手づから殺し。最愛の妹妻さへ
眼前に自殺せしめ。且哀み且慚て。共に死んと思ふのみ愛惜の心なるに
まづ谷折と木二郎が死骸に石を著て。庭の池水へおとし沈め。又彼稲葉山
の硯を投入れ。銭八貫百文をおのれが胥へ繋著て。おなじ深水へ身を
投たりしより後たえて冤魂顕れ奇異なるものゝ見えしかば後住なる
法師もなく。忽地に廃寺となりて礎の蹟のみ残せり。されども冤魂を
おそれて里人件の池を埋て。塚を築き因果塚と名づけ。いのらば
かならず霊験あり。されども信心後に等閑なれば崇ありといひ
伝ふ。彼塚の縁起かくの如し。かゝれば不祥の塚なれども。世の為ありとも
不来悪鬼の所為なれば。信ずるに足らず。崇るに足らず。軍用なし

こゝをもて数百年絶たる寺を再興あらんハ物体なしと故事を述道理を
さとし。叮嚀にいさめしかば。道三件のくすり点頭しかば無用の塚と惜むな
おなじ稲葉山の硯のこと件の塚を発して硯を取らむやといふに。衛門ハ又これを
諫めて。鬼神ハ敬して遠ざくと社義なれ。一箇の硯を惜むとひて崇ありと
のひ伝へし塚を発しあんなんハいよくあやくく物体なしとおしとゞめしぞ
をふぞ道三ことばなし。遂にその沙汰に及ず芦月角六ハ此より
なれども故鋭めしくて。忽地主に見おとされて。いとく衛門を恨みけれ
争ひ訴んよしもなく。因果塚へ詣んずと今更鳴手なる所為に似たる
君ハ憚るれにあらねば崇るなどとおのづから。等閑にありふりたる故ぞ五年
前に。角六夫婦ハ時疫にて共に比に身まかりぬ又彼塚の祈子なる一角を
心ざる奸曲にして。才他に勝れしかば。その家終に断絶せり。間結休題一角が

狂死のほか進退谷ることあるものなく。嗣とすべき子もあらざれば。ここに於
て役状せられし家財を沽却せられて。五十金に代り。牧村衛門うけあへりき。
件の金をば三つにわかち。廿五金は廿ヶ月が菩提所へ布施しつ。祠堂料に是
を賜し。又廿五金は諜女諸平と倶にして。年来一角に使はれて両個の奴隷に取
らしぬ。この奴隷ども身に露だも罪なきを。忽地に主に後れて進
退難義にたゆたふよし聞えしかば。牧村衛門これを憐みて。そのこゝろざしひ
そかさて此の諸平が母は一角が乳母なりければ。主家に舊縁あるものなるが。二
親はやゝなくなりて。その舊里は當國なる不破の白木と喚れたり。又諜女は
下総なる。許我の女口にものしけり。故郷に妻あり子あり。近属身上不如意に
なりて。債を贖ふ役義なかりしかば。所縁を募りて美濃路に赴き。一角に使はれて。
僅に二年になりけり。かゝれば件の諸平は。今守りある金の。これらと諜女と。

おのれが数なるをもて欲がたぐひとせる下郎たりしが。一角が祢津が乳兄
弟なればとて主家に由縁浅からず。あるるに一季半年の諜女とは高下もなく。
されどこの金をあるるも公ならずとおもへども守乃賜とどうやさんも
恐ければ足らずながらも二ッにわかちて。十二金餘を腰に著て。是彼
齊一廿ヶ月が宿所を立退て。稲葉山より一里に足らぬ河手村のほとり
まづく東より道次に一軒の酒店ありしかば。諜女諸平はこゝにて両三碗の
茶蘼漉を酌て。別離の情を述ることより。袂をわかんとするに。なほ二三町
ものなもおくりにとて。そのかみ二人獵夫とおぼしきが。小松林の芝生にて。おつ
拳をかためて挑みあり。諜女は人となり。惻隱の心あるものなれば。この光景を見て
そぐまふに過ぎて走り寛く一人を抱留るに。諸平も己とて絞りもどさせ一個
を引とゞむ。縁故をしらずとも一個の獵夫声をふり立。旅容ゝあなたさま

かゝる程ぞゆめんとなしなバ此あたへつれハ復市を呼ぶ彼ハ株義と呼れて是
も彼を加々嶋山の麓にぞりけるハさせる獲のあって腹たしさようちつれ直
里に出て小半升の克白小酔を催しつれまづ草叢へ来て一隻の兎さえ出
か駈出せしに。這奴ハ後追て来るとたに折々て紙ちからまゝに。一声
と兎を駈出せしハつまうちらバ。といかせともへど株義ハ眼を瞬り足を踏しだ
きついても此奴らに汝も鳥銃へあちつかんに。強出しくなどて膝ぶらつ。
騒ことなくハこらバ取る兎を。汝に指ぐとさらせんや。と延しいれます罵る声の
いて酔たりと見えて香をとまかつて吻く息ハ鼻を穿て醂の柿を匂ひ。
去ら。諜介諸平ハこれ紙寛くぞあぐまにてらかもあれど酔たるもの癖をかしバ。
かるどもゆえり返しく緯果べしともあらざれバ。諜介露時寺思しく一
隻の兎を両個のまあり。孰をかつもとらかれた所詮この兎をこれもつよ賣て

價をゆづるまじう取らバ送に恨ハなかるべし。とあれバ復市株義へつぐ。と笑て
うち兎ひとつの裁判ハ現なく理あり。かくまでにいはるゝもかくなりと和睦して兎
の價を百文に定め。則錢をうちとりて。諜介ハに歓びゆゑ株義ハ久儀備
んとて。此のまゝ走り去。復市ハ家路なる。加々嶋をさして立かへるにさとゝ。
殊更に酔たりけん只踉々蹌々として。一歩ハ高く一歩ハ低く。背影の木がくるゝ
まで。両三遍跌きたり。當下諜介ハ。件の兎を引提て。遥に復市を目送て。
呵々とうち笑ひさてさと要ある物を買ねとらぬこらが子諜介ハいまだ疱瘡
をせざるもの皮をバ故郷へ家裹にして。肉ハ今宵の宿りにて羹にせんた
やとおもへど。今さらやまて別るゝばかりなれど和主に饗すべく。送懐さもとおもひ。
といふに諸平うち微笑て。現もこれハ果報なるべし。おうちまでかくて別とんに
諜介ハ東をさしてゆく。錦繒水肩掛のかくて赴く。諸平ハ道の程を不破の白木へ

ゆるうまとび西のくに別れつ。又くにとろ中。今彼金と巻ろゞ有よまるとゝ紀へ生涯へもり易し。諜ゞ行るの勅功ありく。ゞとよ多くく賜ゞ。ゆくろくとけて得さりしぞやゞと人を怨めへ今さくる。娼妓の限りく。奪ひとゝゞやゞとろふ悪心頻よ萌しつ。背後を佶とゝくとび。まゞ諜ぞわふ〜往来の人と迹絶く。彼猟人が送さりゝん一捉の鳥筅とゝ究竟の物うりゞと。搔とりゝんとゝび火縄の滅を両九を固め。且く繫く撞と費せび。窺錯ゞ諜ゞ背を胃へ打抜ゝる。憐むべ〜諜ゞへ一声苦と叫びとあくゞ仰さるふ倒とゝく。煙の中よ息絶けゞ。渚平へ鳥筅亭哩と投棄ゞ。ゞくくよ走りまつ。撃作〜る諜ゞが懐ゞと搦揚ゞ。件の金弐引出〜。莞尓と笑ゝ。ち〜戴き。

渚平

諜ゞ

人のやゞと来ると茅藪紀間道乃ゝ走りつ。舊里ゞ投くゆりしを者。市へ旅客ゞよ寛ゝ。加藤ゞ。

ゝの絶くゝけ。さる程ふ猟夫復も走りゝゞ。六七町酉乃

ゝる程よ酒の醉まゝく上りゝ。ゞくゞく

くゝる。田の畔よ倒ゝつ。半晌あまり熟睡

〜ゝく絶く善悪をわゝざりける。時よ

鞍の荘客们連枷長柄の鎌ゞど

ゞを引提く。動揺こと索来つ。人殺〜ゝふゝり

罵て矢庭よ索紙被〜ゝび復市へこゝとて殺ゝさゝとく。酒の醉忽地醒。

ゞゝりの罪もゝ〜。猝の紙よくゝとゝゝゝゞゞやゝく縛ゞゝる。

この索紙釋ゞゞと咽り殺つくゝ叫ぶゞゞ。荘客们冷笑ひ。

罪ゝゝゝんこの南ゝる芝生ゞて。軽よ殺さゝとゝる旅客ゝ

諜み

あり。其外より又十反あまり。西のうゝそのる叢中より。加々爲山の復市と。称ずるく字
なる。名読を捨てくあり。彼旅客が帯とする紙ゑるを。名読瘡と疑ひる
こゝにてゝ初より人を殺せゝ癖者を。故へとゝみる
知ゝり。犯人を走ゝそ。俺們
も張難脱とぞ。扨るいせそ。
引立ゝと異口同音に罵ゝ。
村長許ゝ申ゝ紀ぬ。ゝゝと
ども復市ゝ。ひがけゝ紀と
ゝゝ。今ゝ夢の心ゝ。ゝゝと。
株菰と和睦ゝ。獲の鬼紙賣ゝと紀。いゝく醉ゝ。

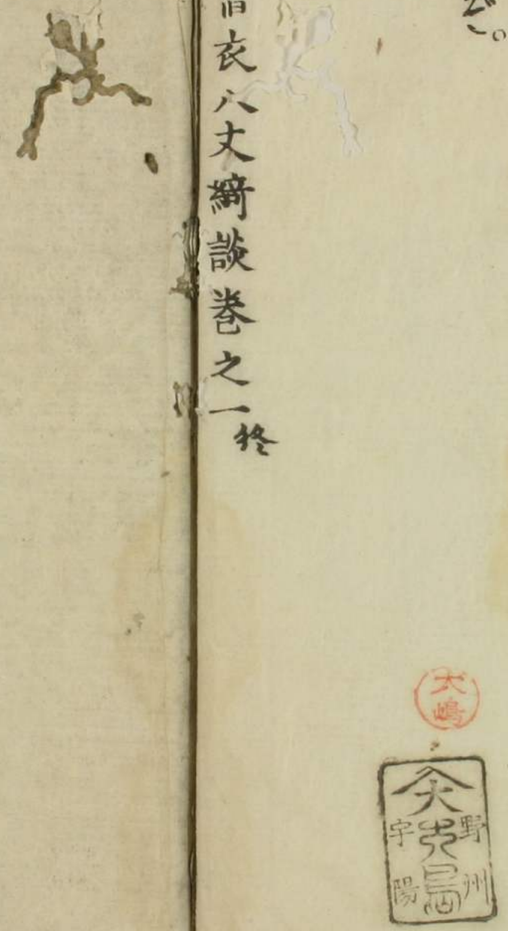
宿許ゝ。ゝゝ。道路ゝ。ゝゝ。遮莫ゝ。ゝ。罪ゝ紀。ゝ。
ゝゝ。ゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
小字ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
村長ハ又株菰を。ゝ。ゝ。
猩の頭巾紙。尋ゝ。某ゝ。
処ゝ。復市ゝ。引別ゝ。山猟
ゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
村長ハ國主ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。復市ゝ。女房間柴ハ。今茲僅ゝ五ゝ。一子岐太郎ゝ。ゝ。紙ゝ。ゝ。天ゝ。叫び。

このぜんの地より叫び加々爲より走り来る。群立人をうち紀こと紀く。今牽き出す良人の家より
孫太郎を推ろり出すこと泣べ。岐太郎を又よくと泣。爲さるうどく郷よりあひ。
そうどとて
岐義の妻
甘の法本
再くこうるさきあるよる。御免こそ。やあのへといふ声いまだ言ずうち拔と。
背へ引ぞまうとさを。親の縲紲を勸解る子の。あらぬ良きこの悲
くく。父いさらん母親。張や裂うん胸苦しさる。涙いとど満潮乃。行時紀
知死期とをひ。敷紀のうどく堪うく。親子三人がもろ共に。声ゆり立く
泣よけり。且く女房間業。やうやく同紙押拭ひ。世うてうるとび殺生を。
うのとをとを。ど慾に耽り。利に誘をうく人を殺を夫あいざるに。
こそどうへ。阿容こと。刃のあく紙び立あらぐ。暗紀獄舍人牽出あふ。
きのへあん刃に。ありく。捕をあふと。なのえーよりいとど痛に血暈に。
據をあ。ど大在土の使に豫くたくいの。あひ茅ある神女湯もよ

ぐうとく。如某渦尻も居らで立ん。あらあ。紀紀なる紀物思ひ時々通霄泣
あひ。曉くハーの足音とひるさを立てく。ゆりのひーと立ちくるを立び生憎に。
心よかる。鶏鳴紀知ひに紀る紙憎くつ。約よひる。今こぐ親子夫婦乃辞別
三人面紀あひて。敷紀いくぐまを境。墨ゆる紀身も面り。ひとくはいるう
まを。とう紀口渡とく復市を禁人とどとうう。流る涙に面紀ゆう背け。
間業よさのこいくる泣そ。犯ひ科ハ一点るけに。ど醉く迷きーを流ひと。
禍の種子泣。泣業とういくこの年来数限りなる紀殺生の報少やあくんぐどん。
今茲ハあくと四十二の尼員とこそ。ひるるに。さりとく人を殺ぐ。
命とぐもんや。ぎでーぐ程ぞ岐太郎も。大人ーう留ちりせよといふ間も時や
稱くんとく。引こくくく。縛の素よりつて恩愛の絆苦ー紀生別を。嘯情を
今要時。いとあり。と留あくぞ。地上に礎と轉輾。號哭ぶ妻と子、泣よんく

貸本料八拾銭無之ハ返ベシ

へ 36 1



裏人も。各袂を儒しけり。さる程に稲荷山より河内の長が祈ふりく牧村
御門長晴。まゞ驕りたる旅客の亡骸を展検みるに。芦月一角が舊奴隷
諜奴と稱せし。渠はその主に後れて。心玄下徳なる。舊里へ帰るのこゝろざし
懐中に守り賜へる金数。必定あるべしとて。その金を紀へ誘しまして。
復市様荒に式鞠問をなす。彼も流のうち。定りなきぞ。りく両個の猶夫へ
そゞぎて獄舎に繋ぎて。程ふ復市へ暴に病づらひつゝ。三日ふりく方まり
けるに。一人既ふ病死せしゝ。再度の糺明ふ及ぶまでに。様義へ申さるゝ加々鳴、
うくりしとぞ。

美濃舊衣八丈綺談巻之一終

大島 野州宇陽 文昌